

令和7年度 特別展

# 明治三陸大海嘯130年 稲むらの火と小泉八雲、 そして釜石



釜石市内土蔵破潰遺物掘出ノ実況



小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)  
画像提供:小泉八雲記念館

開催期間 令和8年3月6日(金)▶▶▶6月21日(日)  
会場 釜石市郷土資料館 津波・震災展示室

■入館料 大人200円/団体100円(20人以上) ※高校生以下、障がい者手帳をお持ちの人は無料  
■休館日 火曜日  
■開館時間 9時30分~16時30分(最終入館:16時)  
〒026-0031 岩手県釜石市鈴子町15-2  
電話/FAX 0193-22-2046

## 明治三陸大津波

明治29(1896)年6月15日、午後8時過ぎ。三陸地方を大津波が襲いました。この津波により、現在の釜石市に当たる区域では6,477人が死亡・行方不明、海辺の家々や漁具漁船のほとんどが失われる大被害を受けました。

この日は旧暦の端午の節句(5月5日)でお祝いをしていた家が多く、また地震が最大震度2とさほど強くなかったため、津波が間近に来るまで気づくことができず、多くの命が奪われました。



救地中の人聲を聞いて救出の図(釜石町)  
風俗画報 大海嘯被害録より

## 小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)と津波

明治三陸大津波のあと、横浜にあった英字新聞社「ジャパン・ガゼット」の記者たちが釜石の被害を取材しました。

小泉八雲は、この明治の大津波の後に『A Living God』(生ける神) という作品を発表しました。彼は英字新聞の記事から、津波がもたらした大きな災害の様子に強い影響を受けたと考えられています。



この作品は、嘉永7年(1854)に起きた安政南海地震津波のときの出来事を題材に書かれたもので、のちに「稲むらの火」として広く知られる物語のもとになりました。

## 明治三陸大海嘯被災後の写真

大船渡から釜石周辺の被災状況を収めたもので、明治29(1896)年7月8日～9日、写真師の宮内幸太郎、福原修、大橋賢之介の3名が釜石に赴き撮影しました。被災から4か月が経過しても後片付けが終わっていない様子や、日本赤十字社などによる臨時病院を見ることができます。



釜石町、市街地の被災状況



津波で釜石港に打ち上げられた船